平成25年度　浦和明の星女子中学校（国語）　解答・解説

解答

一

問1　a　ねんぱい　b　ゆいしょ　c　風土

問2　ウ

問3　ア

問4　体の汚れを落とすこと

問5　A　非日常的空間　B　日常生活　C　浮世の垢を落とす

問6　ウ

問7　ア

問8　イ

問9　エ

問10　極楽浄土

問11　Ⅰ　C　Ⅱ　D　Ⅲ　B　Ⅳ　A

問12　A　ありふれたもの　B　美的対象　C　庶民の文化
D　ささやかなつかの間の至福を楽しむ空間　E　美術館　F　入浴

二

問1　a　隠〔した〕　b　異様　c　後悔　d　ちぢ

問2　貝

問3　エ

問4　ウ

問5　イ

問6　エ

問7　(1)　自分でも知らなかった自分の心　(2)　優越〔感〕

問8　「仄田くん」は、人に対して権力をふりかざし、居丈高にふるまうことに気持ちよさを感じていたが、「いつものぼく」は、人にいばったり意地悪したりすることには向いていなかった。自分はどちらの世界を望んでいるのか迷った挙げ句、「仄田くん」の世界に進もうとしたが、そのとき恐ろしさを感じたため、日頃慣れ親しんでいる「いつものぼく」に戻りたいと願った。

問9　ア

問10　野村くんと一緒に謝りに行きたい〔ということ〕

解説

一　出典は、「ＮＨＫ美の壷　銭湯」所収の町田忍の文章。

問2　直前に「事実」とありますが、どんなことから、傍線①のような「事実」が言えるのかを考えます。「事実」とは、〝現存の銭湯に限っても、全国に五千軒ほどもたくさんの銭湯がある〟ということですから、「日本人は世界に類をみない、お風呂大好き民族」であるということが、この「事実」を裏付けていると見ることができます。

問3　まず、傍線②中の「そんなこと」は、〝銭湯の発祥が施浴にあったこと〟を指します。「あ～極楽極楽」とは、〝何の心配も苦労もなく、まるで極楽にいるかのようにいい気分〟であるときに口に出す言葉ですし、また、「お経」は、信心深い人たちにとってはありがたいものであり、共に仏教に関連しています。ですから、湯に浸かっていい気分の時に、「あ～極楽極楽」と言ったりお経を思わず唱えてしまうのは、銭湯の発祥が施浴（仏教布教のための入浴）にあったことと関係があったからではないかというのです。直後の「日本人の入浴というものは、」「どこかで極楽浄土の世界とつながっている」「気分を癒すことにも重点を置いている」と述べられている箇所も考える手がかりです。→ア。

問4　「機能」とは、〝その物が本来備えている働きとか役割〟といったことです。したがって、「入浴をするだけの施設」としての、本来の役割を考えればいいわけです。直前に着目すると、「日本人の入浴というものは、単に体の汚れを落とすこともさることながら、気分を癒すことにも重点をおいている点が、機能重視の現在の欧米諸国の入浴方法と大きく異なっている」とあります。

問5　「温泉」と「銭湯」の違いが述べられている傍線④の二つ前の段落に着目しましょう。「銭湯」は、「温泉のように娯楽として行くところではなく、【日常生活→B】の中において日々使用する施設である」。「しかし銭湯は」「日常性の中における非日常性という点が重要なの」で、「【浮世の垢を落とす→C】ために、あえて【非日常的空間→

A】を造る必要がある」。

問6　傍線⑤の直後の段落に着目して読み取りましょう。「自分（湯船に入る者）がその風景（ペンキ絵の中の風景）を見ながら湯に浸かっている気分になれる」し、「富士山で清められた水の中に自分の身をゆだねる」気分を味わうこともできると言っています。→ウ。

問7　日本人の富士山に対して抱くイメージは、頭に白い雪を頂き、新緑に映えた山なのです。ですから、一つの絵の中に二月頃の雪、五月の新緑という二つの違う季節の景物が描かれていても、違和感を抱かないというのです。→ア。

問8　「鯉の滝登り」というのは、〝中国の黄河中流にある竜門の滝を登ることのできた鯉は竜になる〟という故事から生まれた言葉です。人が「立身出世」することのたとえです。アの「不老長寿」は、〝いつまでも年をとらず、長生きをすること〟という意味です。

問9　直後の二つの例から考えてみましょう。「年に一度描き替えるくらいなら、いっそのこと手入れの楽なタイル貼りにしたほうが良い、という考え方」、〝桶の大きさが、東京の銭湯より一回り小さいのは、大きいと湯をむだに使ってしまうから〟。確かに道理や論理にかなっていますね。こういうことを「合理的」と言います。

問10　直前の「脱衣所から浴室に行くまでのトンネルのような通路は」「あの世とこの世を結ぶトンネルのような気がした」の二つの箇所をヒントにします。1ページに、銭湯で湯船にどっぷりと浸かった人は、思わず「あ～極楽極楽」と唱えてしまうとありました。それくらい銭湯は、人をいい気分にさせてくれる場所なのです。「入浴という行為は少なくとも、どこかで極楽浄土の世界とつながっている」、〝宮造り銭湯の唐破風と呼ばれる屋根は、極楽浄土への入口へのサイン〟とあります。こうしたことから、「銭湯」を「極楽浄土（＝全てが満ち足りた、苦しみのない楽しく美しい世界）」に見立てていることが読み取れます。

問11　A「東京型銭湯の特徴」→「東京の定番宮造り銭湯は、外観からして豪華な造り」、「脱衣所の天井が吹き抜け」、「ペンキ絵も東京型銭湯の特徴のひとつ」、「タイル絵を多く使用している」、「派手さを好む東京人の気品」→Ⅳ。
B「大阪型銭湯の特徴」→「ユーモアを表現している様式が多い」、「個性的な様式の銭湯が多い」、「洋風モダンな銭湯が多い」、「二階が休憩室として利用されていた」、「使用されている部材は御影石などと豪華」→Ⅲ。
C「京都における銭湯の特徴」→「外観も和風木造建築が多い」、「みやびの美しさを凝縮した仕掛けを随所にみる」、「これらを造る職人にも恵まれていた」→Ⅰ。　D「どれにもあてはまらないもの」→Ⅱ。

問12　3ページの「さて、銭湯における～」以下最後までをしっかり読めば、正解が得られます。A…〝銭湯は庶民の身近で長年利用されたもの、つまり、【ありふれたもの】だった〟。　B…「銭湯というものはつい最近までは、【美的対象】として見られることはほとんどなかった」。　C…「銭湯が、～登場してすでに約八百年ほどになる。【庶民の文化】であり、～」。　D…「そこ（銭湯）には、庶民の【ささやかなつかの間の至福を楽しむ空間】がある」。E…「銭湯をまるごと【美術館】と考えてみる」。F…「湯に浸かって（＝【入浴】）欲しい。浸かってこそ本来の銭湯の美のツボが理解できる」。

二

出典は、川上弘美「七夜物語　上」。

問2　「貝のように口を閉ざす」とは、上唇と下唇とをくっつけて口を真一文字に結んでいる様子を、二枚貝がピッタリと閉ざされている様子に例えた表現です。

問3　直前の「それに仄田がどっちについても、まったく変わりはないだろ」という野村くんの言葉に着目します。「どっちについても、まったく変わりはない」ということは、いてもいなくても同じということであり、明らかに仄田くんを軽んじ、見下した発言です。みんなも同意なのですが、その感情をあからさまには出さず、押さえつけて笑っているのです。直後のさよの「仄田くん、あれであんがい頼りになる」という思いや野村くんの「仄田のことなんて、どうでもいいじゃないか」という言葉からも、仄田くんが、みんなからみくびられていることが読み取れるでしょう。ア「野村くんの発言に従わないと、自分たちがいじめられる」→×。　イ「言動が矛盾しているのではないかと苦笑している」→×。　ウ「改めてそれを得意気に発言した野村くんを哀れんで笑っている」→×。

問4　「どうして見てたの」という仄田くんの問いかけに対して、さよは、どうしてよいのかわからず困っています。

問5　仄田くんは、クラスの男子に取り囲まれ、責められたりばかにされたりしていたのをさよにすっかり見られていたことを知ったのです。これだけでも自尊心は傷つくであろうに、そのうえ、さよから「何もなくて、よかったね」とか「あたし、何もできなくてごめんね」などと哀れみをかけられたら、ますます自分がみじめに思えてくるでしょう。　ア「本当は自分のことなど気にかけてもいないさよ」→×。　ウ「助けてくれなかったさよに、今さら謝られても許す気持ちにはなれない」→×。　エ「必死に謝るさよの低姿勢な態度が理解できない」→×。

問6　友だちの仄田くんに対するここまでのいきさつ、および「激しく降る雨」という表現から考えても、アの〝簡単に学校を休む態度を両親から厳しく責められる〟（ここで突然両親が登場するのは唐突すぎます）とか、ウの「悩みが、一気に洗い流される」は外せるでしょう。直前の「野村」、「あいつ……」という仄田くんのつぶやきからは、野村くんへの反発心が読めるでしょうし、また、この話の後半（8ページ）に、仄田くんの思いとして「どうして人は、ぼくのすばらしさを認めようとしないんだ。どうしてぼくは、人からばかにされなきゃならないんだ」とあ

ることからも、エの内容が正解となるでしょう。イの「自信をなくし、悲しんでひどく涙を流す」わけではありません。

問7 (1) 仄田くんの「影」は、仄田くんがいばったり、意地悪したりするときに、〃大きく不吉なかたちを広げたり、はちみつ色をおびたりする〃のです。ところが、仄田くんは「自分の影がそんなにも恐ろしいものになっていることに、気がついていない」ません。また、「悪いことをした」と後悔しはじめたとき、影は、少しだけ縮み、色だって、ふつうの黒に近くなってくるのです。そしてまた、自分が何を望んでいるのかわからなくなってしまったとき、「影」は、大きく広がったり縮んだり、はちみつ色になったり、元の黒に戻ったりと、めまぐるしく変化」するのです。こうしたことから、仄田くんの「影」は、普段自分でも気づかない心の深層に秘められていた自分自身のほんとうの心、つまり「自分でも知らなかった自分の心」の象徴と考えることができるでしょう。

(2) 「『ぼくと一緒に、お父さんに謝ってくれないかい』」と「野村くんが、すがるように頼んだ」とき、「影」が、「濃いはちみつ色」になったということは、すがるように頼む野村くんに対して、仄田くんが、自分が優位に立ったという思いを抱いたからでしょう。そういう思いを「優越感」といいます。

問8 「仄田くん」→〃居丈高にふるまうことが、気持ちよかった〃。〃権力をふりかざす〃。〃いばり続けたあげく、悪いことをしても知らんふりをする〃。「いつものぼく」→〃いばったり意地悪をしたりすることがない〃。〃いばったり意地悪をすることに向いていない〃。「しおらしい」。〃そのうちに、自分が何を望んでいるのか（→どちらの世界に進んだらいいのか）わからなくなってしまった〃→「野村病院の階段を走りおりていった」→「これからどこに行こう（→どちらの世界に進んだらいいのか迷った）」→「立ちすくんだ。足もとからは、まだはちみつ色の影が細長くのびている（→居丈高にふるまう世界に進もうとする気持ちはまだあったが、そちらに進むことに恐ろしさを感じ、立ったまま動けなくなってしまった）〃。→「いつものぼくに戻りたいよ」。こうした気持ちの動きをまとめていきます。

問9 直前の内容をしっかり読んで考えます。今までの仄田くんは、〃ぼくにはちゃんと、価値があるから、ばかにされても、平気だ〃と思っていたのでしたが、今、〃人から価値を認められないことが、心の奥底では、悲しくて、いやで、くやしかった」という「ほんとうの自分の気持ち＝自分の中にある激しい劣等感」を知ってしまったのです。「仄田くんはもう、自分のその気持ちを知らないふりはできなくなってしまった」、つまり、〃自分の気持ちと向き合わなければならない〃ために「みじめさ」を感じているのです。

問10 ここでは仄田くんは、もう「いつものぼく」に戻っています。問7(2)で見たときは、折れた朝鮮人参を手にして、野村くんが、「ぼくと一緒に、お父さんに謝ってくれないかい」と「すがるように頼んだ」にもかかわらず、仄田くんは一緒に謝りに行きませんでした。しかし、「いつものぼく」に戻った今の仄田くんは、「野村くんと一緒に謝りに行きたい」と決心したであろうと考えられます。